

## 第 12 号. 地元プレッシャーに勝てなかったシッディヴィナイカ・グループ

(平成 17 年 8 月 28 日発行)

ビシャカパトナム市郊外にあるシッディヴィナイカ・グループ。

8 月初旬に、このグループが、地元のプレッシャーに負けて政府の推進する SHG 連合体に登録してしまう、という出来事があった。これは、まあよくある話といえば、よくある話である。

SHG 全盛のインドでは、1 人のメンバーが複数のグループ (SHG) に属していたり、1 つのグループが、州政府などが推進するグループとして名前を持っていながら、他に 2, 3 の「NGO が組織した」グループとして名前を持っていたり、そんなことは常識なのであった。ドナー側だって、政府にしる、NGO にしる、1 人のメンバーがいくつの SHG に属してようが、知ったことじゃない。ドナーが招集したミーティングにきて、ドナーが支援したいものを、支援したいときだけ「この SHG は私が推進しました」と言っていれば、それで別に問題ない、という具合。

NGO スタッフが来たら、「アタシらは 〇〇 という NGO の SHG よ」と言い、政府の役人が来たら、「アタシらは政府の SHG よ」と言い、また違う NGO が来たら、「〇〇 という NGO の SHG よ」と毎回、SHG の名前を変えて、ローンでも、ガストープでも、無料の薬でも、政府なり NGO なりが「支援したい」というものは何でももらっちゃう、というはっきりしたポリシーを持っているオバチャンたち。

もっとも、政府のプレッシャーというのは無視できないものが多くて、地元の有力者と結びついて「今、政府承認の SHG として名前を登録しないと、学校も道路も住宅建設もおまへの SHG だけがもらえなくなるぞ。」、「このスラムにいらなくなるぞ」という類の脅迫もしばしば。

そもそも自分たちの SHG に何が必要で、将来何をしたいのか、よくわかっていないオバチャンたちは

そんな脅かしに、あれよあれよと巻き込まれ、政府や NGO の言うままに名前を登録する、ということば、しばしば。オバチャンたちは、どんな会則のもとで、どんな義務があり、どんな権利が有るのか、全く知らないまま会費を払い、署名をして、政府や NGO が設立した SHG として、登録をしてしまうのであった。

VVK のメンバーであるシッディヴィナイカ・グループのところにも、この 8 月、ある NGO のスタッフがやってきて、しきりに「今、この地区の SHG を、この郡や県レベルの連合体として、登録しないと、住宅供給や銀行ローンといった政府のスキームが受けられなくなるぞ。それに、今、登録すれば、格安で 1 人あたり 105 ルピーで、保険に入れるぞ。」と言ってきた。

シッディヴィナイカ・グループは、同じ VVK メンバーであるインディラ・グループとも同じ地区にあるが、この地区全体で約 30 の SHG があり、その地区の SHG のほとんどが政府承認の SHG 連合体として、登録することになった。特に、この地区の地元有力オバチャンで、VVK メンバーには選抜されなかった SHG のリーダーが中心になって、VVK に負けてなるものか、と積極的に同地区の

SHGに働きかけたのだった。

地元有力オバチャンは、前から自分もVVKに入りたい、でもVVKにはすぐには入れないし(現在、新規VVKグループの選出基準作成中)、同地区のシッディヴィナイカ・グループやインディア・グループの助けなしでは、どんなSHG連合体も出来ない、ということでしきりにこのNGOと一緒に政府承認のSHG連合体に入るよう、シッディヴィナイカ・グループに働きかけたのだった。

地元プレッシャーと甘い言葉「銀行からの融資、105ルピーで生命保険、住宅供給、政府承認SHG連合体」に負けて、同地区の他の29のSHGと共に、一つのSHG連合体として登録してしまった

シッディヴィナイカ・グループ。このシッディヴィナイカ・グループが地区のSHG連合体の1メンバーとして登録してしまった話は、ソムニードのスタッフがイシュワリのお葬式に参列したとき、地元の有力オバチャンから聞いていたのだった。

ソムニードのスタッフがいつも通り、シッディヴィナイカ・グループの8月のミーティングに呼ばれて、行ってみると、ちょうどリーダーがVVKの会則案を1行ずつ、メンバーに読んで聞かせて、メンバーが意味がわからない箇所があると、わかるまで説明する、という作業をしていた。VVK会則の条文で「1つのSHGが複数のSHG連合体に登録することはできない」という条文があった。

これはアーンドラ・プラデッシュ州の法律で、SHG連合体を扱う法律で決まっているものであった。ちなみに、VVKメンバーも会則が最終化したら、VVKという名前で登録しようという話になっていた。

特に何の疑問もなく、他の条文と同様にさらっと「1つのSHGが複数のSHG連合体に登録することはできない」と他の読み書きのできないメンバーに、読んで聞かせていたリーダー。

プロジェクト・マネージャー(略:プロマネ)手を挙げて発言:「ミーティングの途中で悪いんだけどさ、ちょっと話していい?」

リーダー:「いいですよ。アタシ会則読むの疲れちゃったし。」

プロマネ:「さっきのその条文、もう一度、読んでみませんか?」

リーダー:「どれどれ、“1つのSHGが複数のSHG連合体に登録することはできない”、さっき読んだところじゃない。」

なぜもう一度読めと言われたかわからないまま、もう一度条文を読んだリーダー。

その数秒後、目をまん丸にして「ギャーーーーー」と叫んだ。

わけのわからない他のオバチャンたち:「リーダー、どうしたのよ、突然、叫んじゃって。」

リーダー:「アタシ知らなかったわ。1つのSHGが複数のSHG連合体に登録できないんだって!!なんでこの地区のSHG連合体に登録しちゃったのかしら。知ってたら、VVKで登録したのに。いやーどうしよう。」

オバチャン1:「えーーーーーっつ!アタシらもうVVKで登録できないわけ?!」

リーダー:「そうよ、だってこの地区のSHG連合体に入ってしまったシッディヴィナイカ・グルー

ブは、VVKでもう1つのSHG連合体のメンバーグループとして登録できないって法律があるのよ。」

オバチャン2:「ウソー！でもアタシちょっと嫌な感じがしたのよね。連合体ってVVKだって7つのSHGの連合体で、この地区のSHG連合体にも入るなんて言ったら、2つの連合体で会費を2回払うことになるもんね。それはちょっと家計が苦しいわよ。」

オバチャン3:「そうよ、そうよ、アタシもあのNGOの人が来て言うことが、なんかよくわからなかったの。急いで登録しろって言うばかりでさ。あーあ、この地区の連合体に入るんじゃなかった。リーダーが入ろうって言うから、入ったのに。」

怒りのリーダー:「アンタねえ、アタシ1人が悪いわけ！みんなで話したとき、大部分のメンバーが地元のSHG連合体に入るって同意したじゃない！そうやって都合が悪くなるとすぐリーダーのせいにするの止めてよね。アンタだって、SHG連合体の会費も保険料も、もう払っちゃったじゃないの！」

オバチャン4:「だいたいね、アンタも悪いのよ！（別のオバチャンを指して）アンタも地元のSHG連合体に賛成してたじゃない！」

リーダー:「アタシたちそのNGOに、1人10ルピーの会費も払った、105ルピーの保険料も払った、お金のこともショックだけど、とにかくVVKはどーしたらいいの!？」

メンバー全員が大声を出して、大議論が始まる。

毎度お馴染みのオバチャン大喧嘩。

ラマラジュー(ソムニード・スタッフ):「熱い議論の最中にまた割り込んで悪いんだけど、ちょっと話していいかい？」

オバチャン5:「どーぞ、どーぞ。あーもう、どうしたらいいか教えてよ!!!」

ラマラジュー:「アンタたちのうち、そのNGOが持ってきた連合体の会則、読んだ人いるのかね？」

リーダー:「会則なんて見せてもらってない。“見せて”って頼んだら、“今度持ってくるから、今はとにかく会費を払って、書類にサインしろ”って言われた。」

ラマラジュー:「じゃあ、会費を払った領収書や、保険に入ったという証書なんかはもらったのかい？」

オバチャン5:「そんなもらってない。アタシら騙されたのかもー！」

それから、また大混乱。

グループメンバーが「リーダーのせいだ」と追及し、リーダーが「アタシ1人の責任じゃない」と反撃をし、「だから連合体に登録するのは嫌だった」、あーだ、こーだ、の大喧嘩続く。

この地区のSHG連合体に入るよう進めたNGO、実はソムニードのスタッフで、同事業担当のラ

マラジューが以前、勤めていた州政府の事業で一緒だった元同僚が設立したNGOで、今では政府との連携はない。ただ連携はないと言っても、州政府や政府系の銀行には「毎月いくつのSHGにいくら融資しなければならない」というノルマがあるので、そのノルマ達成のために、わずかなコンサル料で政府から雇われているようなNGOは多くあり、このシッディヴィナイカ・グループにやってきたNGOもそのようなNGOの一つ。

ラマラジュー曰く、このNGOが用意したSHG連合体の規定を読まなければわからないが、大抵、この手のSHG連合体の代表はNGOの代表が兼ねていて、その代表の思うままに、保険料の1人105ルピーなど、どうにでも使われてしまうものらしい。

この出来事でスタッフが学んだのは次のことだった。

- ・PCUR-LINK事業で何度も研修をしてきたけど、まだVVKが自分たちの判断に自信を持つほど強くない。言い換えれば、地元のプレッシャーに対抗する力がない。
- ・VVKの一番優秀なリーダー(シッディヴィナイカグループ)も、規定を読んで、それを理解してから決断する、自分が理解するまではどんな書面にもサインしない、ということを経験していない。

ソムニードのスタッフが大混乱のミーティングを後にするとき、リーダー・オバチャンは、「今すぐ、この地区のSHG連合体から脱退してやる！」と息巻いていた。

とにかく、このミーティング以来、同グループのメンバーはVVKの規定を一行ずつ注意深く読むようになって、わからない箇所に対しては、わかるまでリーダーやスタッフに質問するようになった。まだVVKのメンバーたちは、誰もその会則を理解していないので、SHG連合体として、登録するにはまだまだ時間がかかる。PCUR-LINK事業では、会則も理解しないようなオバチャンたちに団体登録なんてもっての他なのだった。だいたいSHGのオバチャンの誰も会則を知らないのに、マッシュルームのようにSHGが出来て、その連合体まで出来て、SHG大ブームなのに、会則もグループの一員としての義務や権利なんか全くわかってないオバチャンたちが大多数なのだった。

スタッフは一貫して、「VVKから抜けてもいいんだよ。まずは自分たちでゆっくりと時間をかけて、自分のSHGにとって何が大事なのか、よく考えるんだよ。」とオバチャンたちに伝えてある。

さて、シッディヴィナイカ・グループは一体、どんな解決策を見つけるか？

そこで、プロマネは早速、この事件をジャヤチャンドラン(同事業のご意見番、タミルナド州のNGO代表)と黄門さま(ソムニードの代表理事、別名:水戸黄門)に告げ口。

プロマネ:「フフ、聞いてくださいよ、大変だったんですよ。シッディヴィナイカ・グループで...以下略」

ジャヤチャンドラン:「メンバーは今、感情的にVVKに残るとか、地元の連合体を取る、とか言うだろうから、まず10日間はじっくり考えさせる。VVKで連合体として登録する場合の利益と不利益、地元の連合体に登録した場合の利益と不利益を全部書き出させて、それを記録に残せ。その記録を他のVVKメンバーとも共有して考える。すごくいい教材になるぞ。」

黄門さま：「根拠を挙げさせるのじゃ。ジャヤチャンドランの言うように利益と不利益のすべてにその根拠を挙げさせるのじゃ。結局、会則も読まず、保険の証書も、会費の領収書も取らず、根拠のない話に踊らされたわけじゃろ、だから、根拠が大切なことをわかってもらうのじゃ。」

ここで、もう1人ソムニードのスタッフに同じ話をしたところ...

スタッフ：「地元のプレッシャーにSHGオバチャンたちが、負けるのは当然だ。それで地元のSHG連合体に登録しなかったら、政治家とか役人とかまで引っ張ってきて、そのNGOはシッディヴィナイカ・グループにプレッシャーかけるだろうな。そして、シッディヴィナイカ・グループは間違いなく、その地区で村八分になるぞ。他のVVKのメンバーグループだって、そのうち地元のプレッシャーに負けて、地元のSHG連合体に登録するだろうな、そうしたらVVKはなくなり、PCUR - LINK事業はおしまいだろうな。」

プロマネ：「PCUR - LINK事業はね、VVKのメンバーSHGがたった1つになってもやるんだから！地元のプレッシャーに負けるか負けないかはそのSHGが決めることで、アタシたちスタッフの知ったことじゃないでしょ！今、PCUR - LINK事業がやっているのは、そんな地元のプレッシャーと戦う術やオバチャンたちが自分たちで自分の希望するビジネスを仲間ですべてやっていたらいいか、その技術を身につけることなんですっ！」

ラマラジュー：「まあまあ、プロマネ、落ち着いてください、そんな技術は昨日今日で身に付きませんよ。今、VVKは、本当にがんばっているんですよ。あと2年ありますから、きっと大丈夫ですよ。」

と、怒りのプロマネをなだめるラマラジュー。

思えば、ラマラジューはSHGオバチャンたちもなだめ、プロマネ・オバチャンもなだめる毎日である。さぞ苦勞の多いことだろう。

昨年、オバチャンたちが視察にいったタミルナド州のSHGの連合体による「アクシャヤ銀行」が、その地区の行政の長である県知事が政府の推進するSHG連合体に登録しなさい、と言った申し出までも無視して、自分たちで住宅ローンや飲料水の確保、学費ローンを組んでやりくりするようになるまで5年近くかかっている。もちろん、ここまで何度も何度も地元のプレッシャーと戦ってきたアクシャヤ銀行のオバチャンたち。誰かが施しの手をさしのべてくれるのを待つばかりのオバチャンから、自分の欲しいものは自分たちで手に入れるようになったアクシャヤ銀行のオバチャンたちのように、VVKがたった1年でその状態になるのは不可能というのは当然である。

10月に再度、「アクシャヤ銀行」を訪れるVVKのオバチャンたち。前回の視察では、個別のグループの運営(貯蓄とローンのやりとり)しか目に入らなかったオバチャンたちだが、今度は「SHG連合体の運営とは一体どういうことか」を学んでくることだろう。VVKのオバチャンたちは、「VVKというSHG連合体をどう運営してゆくか」で今、頭がいっぱいなだけだから。

**事業開始から1年後のスタッフ～本人が気づかない変化～**

8月、SHGメンバーのイシュワリをはじめ、他のVVKメンバーの家でも家族が病気で亡くなる、というメンバーが2名ほどいて、VVKメンバーは7つのグループで少しずつお金を出し合い、夫を亡くしたあるメンバーにお見舞金を出すことにした。VVKのリーダーたちで緊急ミーティングを開き、経済的にもっとも切迫している1人のリーダーをみんなで助けることになったのだった。VVKの7つのグループが自主的に、10ルピーでも、20ルピーでも1人ずつ出し合って、緊急に現金の必要なメンバーを支援する、この「アタシたちは1人じゃない、VVKはみんなで助け合う組織なんだ」という意識が見られた瞬間であった。

事業開始からわずか1年、VVKのこの団結力に、目頭を熱くするスタッフ。

さて、それはさておき、毎回、連れ合いが亡くなったり、事故に遭う度に、そうそう支援できるわけでないVVKメンバー。そういう場合に備えるにはどうしたらいいか、マヒラ・アクションのスタッフたちが「VVKで生命保険や傷害保険に入ったらかどうか」と事務所で話し合っていた。

ここでもう一度6月のPCUR - LINK便り第10号をご覧ください。平気でSHGの月別ミーティングに介入しては、「こーしろ、あーしろ」となんとか、SHGメンバーに「教えよう」としていたマヒラ・アクションのスタッフたち。この調子だと、8月のSHGグループ・ミーティングでも「保険にはいるべきだ。」とSHGメンバーに演説しそうな感じなのだが、あの6月のPCUR - LINK便りにご紹介した同じスタッフ(パルバティ)が、なんと8月に大きな変化を。。。。

パルバティ(マヒラ・アクション・スタッフ):「ちょっと、発言してもいい?」

オバチャン1:「あ、いいですよ、もうアタシたちのミーティングも終わりなので、どうぞ。」

パルバティ:「この間、連れ合いの亡くしたあるVVKのメンバーに、みんなでお見舞金を出そうって決めてたでしょう?」

オバチャン2:「そうそう、VVKの7つのグループメンバーで話し合って、彼女、とても困っているみたいだから、今回は緊急ミーティングを開いて、アタシたちで少しでも彼女を支援しよう、ということになったの。」

パルバティ:「それは、とてもすごいことだわ。VVKの緊急ミーティングまで開いて。でもね、きょうこういうことはまたあると思うの。そのときも、またVVKは、お金を出し合って、そういうメンバーを助けてあげるつもり?」

オバチャン3:「まあ、1度や2度だったら、なんとか1人10ルピー、20ルピーって助けてあげられるけど、アタシたちだって生活が楽でないから、毎度になると困るわねえ。」

オバチャン4:「そうねえ、なんかそういう場合に備えておく必要はあるわよねえ。」

パルバティ:「“備える”って具体的にどういうこと?」

オバチャン4:「うーん、VVKで別に積み立てしておくとか?」

オバチャン5:「なんか、事故にあったり、人が亡くなったりしたときに積み立てておくのってなんかあったよね?この間5月にSHG連合体の視察に行ったじゃない?あのとき、なんかあったよね?」

オバチャン6:「それ、セイメイホケンとか言うんじゃない?」

パルバティ:「そうそう保険には、色々あるわよ。事故にあったとき、病気になったとき、物が盗まれたり、そして家族や自分がなくなったとき、などにお金がもらえとかね。」

オバチャン7:「あらー、ホケンっていうのはたくさん種類があるのねえ。」

パルバティ:「今度のVVKのミーティングで保険のことを話してみたらどう？他のグループも興味あるかもしれないし。」

オバチャン7:「そうね、アタシらホケンのこと知らないからね、調べてみるわ。」

という具合に、話を進めるパルバティ。

2ヶ月前なら、SHGのミーティングではスタッフはオブザーバーだ、ということも理解できず、いつでも自分が話したいこと、話したいときに、SHGの許可もなくミーティングで発言してばかりいたパルバティが。。。。しかも、ミーティングで口を開けば、「貯蓄は毎月きちんと払うべきだ。」「ミーティングには必ず時間に来るべきだ。」とにかく「　　するべきだ。」を繰り返していたパルバティが。。。。とても自信を持って、上のやり取りをするパルバティ。ミーティング後に、この感動を早速、パルバティに伝えるプロマネ。

プロマネ:「今日のミーティングでの話し方、とても上手だったねえ。自分は保険という言葉を一言も出さずに、メンバーに保険のことを考えてもらうようにしていたね。とてもよかったよ。それに、手を挙げて、メンバーの許可を取ってから話をしていたしね。いや、パルバティも変わったねえ。」

パルバティ:「あら、手を挙げて発言するなんて、当然ですよ。だって、これはSHGメンバーのミーティングであって、アタシたちスタッフのミーティングじゃないんですからね。アタシはいつも手を挙げて発言してますよ。黄門さまだってそうやって発言してるじゃないですか。アタシは、SHGのメンバー自身に考えてもらおうって思っただけなんですよ。」

プロマネ:「うーん、パルバティ、6月のSHGミーティングで自分がどうだったか覚えてない？」

パルバティ:「さあ？私はいつも今日のようにしていますよ。ふいふい。今度のVVKミーティングでも今日のように提案してみますよ。あともう一つ、アタシはプロマネが“こうやってホケンのこと話せば”って言ってくれたのをやってみたんですよ。そんなに驚いているところを見ると、何を言ったか忘れてるでしょうけど。」

プロマネ:「えっ！私が何か言ったの？でも、まあその調子、調子。」

他のスタッフも、グループ内で、「やれローンをアタシによこせ」、「アタシにもローンをよこせ」、といったミーティング中の喧嘩に8月は一切、口を挟まず。「なんとかしてー」とオバチャンに言われても、わざわざ手を挙げて、「今、アタシの意見を言っていないか？」と聞くマヒラ・アクションンのスタッフ。メンバー全員の許可を取ってから、「アンタのグループなんだから、アンタたちで解決しなさい。アンタたちローン返済予定表、またつけていないでしょ。予定表をちゃんとつけていたら、翌月にいくらグループにお金が入ってくるか予想できるのにねえ。」なんてアドバイスしちゃうスタッフ。

ほんの2,3ヶ月前だったらグループ内のそんな喧嘩にも勝手に介入して、「　　さんが1,000ル

ピー、　　さんは 5,000 ルピーのローンを取ればいいのよ。」と勝手に決めていたスタッフが。。

そんなスタッフの嬉しい変化がちらほら現れてきた 8 月。

しかし自分が大きく変わっていることにはあまり気づいていないマヒラ・アクションのスタッフたち。  
自転車にいつの間にか乗れるようになっているのも、本人は気づかないものだし。。

\* \* \* \* \*